

第5回亀岡市学校規模適正化検討会議 議事摘録

■日時

平成27年6月4日(火) 14:00~16:00

■会場

亀岡市役所 2階 202・203 会議室

■議事

1. 開会
2. 新委員の紹介.
3. 協議・検討事項
 - (1)中学校区の適正化の方向性について
 - (2)アンケート調査について
 - (3)意見交換
4. その他
5. 閉会

■意見交換発言内容

(事務局説明「資料1 中学校区の適正化の方向性について」「資料2 平成27年度子どもたちのより良い教育環境について考えるアンケート調査実施要項」)

会 長：昨年4回目の委員会で、それまでの論点整理を踏まえて前進に向けた手法の提案をしてもらった。昨年度の最後に、今年度は各学校の状況を見ながら具体的に検討していこうということで終わり、今回それを踏まえて方向性を提案してもらった。またそれを住民に直接聞くのがアンケートだと理解している。協議事項1について意見を頂戴したい。

委 員：新しい委員として就任し、教育委員会で事前に勉強会もしてもらった。昨年の議事録を見たところ、しっかりとした議論がされており、4回目までにある程度の方向性が出ていたと思う。今回はそれを中学校区別にうまく整理されていると思う。市域を周辺部、中心部のうち亀岡等の旧地域、新住民の多い地域の3つぐらいに分けて考えると良いだろう。周辺地域は小中一貫校を含めた統合を視野にいれていく。中心部の旧地域は小さい学校もあるので統合、校区見直しも必要。中心部の新しい市域は分離新設された校区に無理があり最善ではなかったと思う。社会条件が変わっているので弾力的な校区変更があるべきで、小中一貫校も必要。一定の方向性を委員の意見を踏まえてうまく整理されていると思う。

会 長：おおまかに3種類にわかれているのではという意見でした。

委 員：校区の選択制は、中心部の地域同士ではなく中心地域と周辺地域との間での選択性が良いのではないかと。

委 員：東・西別院小学校は歴史のある学校であり、無くなると限界集落にもなり取り返しがつかないことになりかねない。新しく住む人には学校や保育所があるか病院はあるかということが第一に問われる。学校が無いとなるとへき地になる。統廃合は何があっても大反対であり、西別院からも強く言ってくれという同様の意見をもらっている。東別院町の隣の高槻市立榎田小学校は、高槻市街地から20人程度通学している。亀岡でも大きな学校から田舎の学校へ児童生徒数を調整することができないか。

会 長：大切な意見。ただそのご意見は昨年度に出ており、榎田小学校の例も勉強している。

委員：育親中学校区に住んでいる。現在1学年2クラスだが2～3年先には小学校3校集まっても1クラスになる。うちの下の子が小学校5年生だが、リレー大会でも4年生は5名しかおらず、あっという間に終わってしまう。運動会も半日で終わる。子どもの競争心が無い。中学校も1クラスになるので、小中9年間同じクラス同じ顔ぶれとなるので、統合も必要ではないか。

会長：よく知っている地域であり、良い地域なのに難しい問題を抱えており大変な時代ですね。

委員：つつじヶ丘小学校、南つつじヶ丘小学校の通学距離のバランスとは具体的にどういうことか？

事務局：つつじヶ丘小学校の児童で、南つつじヶ丘小学校の前を歩いて通学する子どもがいる。南つつじヶ丘小学校の開校後にできた団地だが、校区変更ができずにこういうことになっている。

委員：それは曙台4丁目の特化した問題か。表現をみると市全体をシャッフルするように聞こえる。

会長：おっしゃる通りだが、その意見も昨年の会議でもでていた。

委員：P3に「亀岡市の子どもを増やす施策」とあるが、3年後、6年後どうなっているのか。見直しはどうか。

事務局：総合計画「夢ビジョン」の後期基本計画の見直しをしている。それにあわせて各地域が定める地方版総合戦略を検討しているが、校区の見直しにあわせて地方版総合戦略を検討するなかで人口・子ども増加につなげていきたい。それを27年度中に策定する予定である。

委員：複式学級になる基準は何か。

事務局：2学年の児童・生徒で編成する学級が、小学校で12人以下、中学校は8人以下が基準となる。

委員：それに従って複式学級にするかを判断するのだと思うが、例えば、別院中学校は小学校を統合してもすぐに複式化がありうるのではないか。

会長：一般論としてはそうなる。そういう悩みは全国各地で生じている。だから文科省が適正化について打ち出してきている。

委員：総論的にいえば複式学級もすべてが悪いことではなく一部には良い所がある。例えば画一的に通学距離が決まっているが、長くてもマラソンが強くなるとか体力的なメリットもある。自治会との関係もあるので、どこも一つの基準を守って同一にする必要は無く、特徴のある部分も大切にすればよいのではないか。

会長：地域のこともあるので、個々に丁寧に考えていくことが必要。

委員：千代川町では子どもが少しずつ増えている。亀岡を魅力あるまちにして働く場所もつくるなどして、人口を減らさず若い人の住めるまちづくりをすべきだ。

会長：そういう点も考えないといけない。

委員：お母さん方の話を聞くと、小規模校では運動会がすぐ終わるなどの問題がある。一方で人数にこだわるべきでないという気持ちもあるが、何が正しいのかよくわからない。

委員：5年前に亀岡へ引っ越してきた。自然があり子どもは喜んで学校へ行っている。複式学級にこだわりすぎてそれを統合しないといけないという考え方だと、子どもの教育のため

にという聞こえは良いが、結局子どもの数は減り学校は減っていく。全市選択制にするなど、全国でやっていないことをすればどうか。例えば、いじめにあって引っ越しをしたと考えている人が、亀岡では好きな学校を選べるとなると引っ越しの動機にもなるのではないか。保護者が求めることはまさに魅力があることであり、選択できる魅力をつくることが子どもを増やす手段の一つではないか。

委員：去年から特に小規模校について統廃合による問題も話されてきた。校区選択制について、例えば大規模校である安詳小学校と小規模校である東別院小学校等の特色の違うところを選ぶと価値があり、隣同士の学校ではあまり意味がない。発達障害で大人数の中にいるのがしんどくて自然環境の中で過ごすほうが良いという子どももいて、選択肢があった方がよい。しかしあまりに小さい学校が多すぎるのも問題。小規模校を無くすのもおもしろくない。

会長：学校選択制は、元々はアメリカの制度で石原知事時代の東京でも行われている。それらのデータをあてはめると亀岡では中学校が3～4校になり学校統廃合が急激に進む。コミュニティ、歴史文化等の大切なものもあるので、単純に取り入れるととんでもないことになる。

委員：山間地域、市街地とバラエティに富んだ亀岡の地域性を大事にすれば東京とは違ったものになるだろう。ブロック毎に地域が協力しあってブロックを守っていくという方向が必要で、提案されたものがひとつの方向であろう。老朽化の問題や児童生徒数の減少もにらんで検討すべきである。

会長：事務局が苦勞して原案を考えている。理論と現実との難しさもある。論点の一つとして学力の問題を参考にお話する。子どもの学力の国際比較、日本の位置をOECDが実態調査している。その中で「チームワークリテラシー」が重要視されており、一定の人数が必要で子どもが少なすぎるとチームワークが形成できないとされている。ただしその人数の基準は人によりまちまちだが、これからの教育には人数を確保しないといけないということもある。

委員：それぞれの地域に特色があり、そこで子どもが育つ力があり、それを活かした教育が大事である。市は小中連携型の一貫教育をすすめようとしているが、それを活かして検討して良いのではないか。特認校の基準を考えていかないといけないが、今亀岡にある教育環境や人、施設を活かしていくべきである。

委員：この4月から施設一体型小中一貫校を開校し2ヶ月がたった。従前は小学校、中学校ともに小規模校だったが、一緒になってできることを教員みんな考えて取り組みを進めている。まず勉強面では、各学年1クラスで20～30人台で、授業に工夫ができるようになり活気づいている。例えば、小学校籍と中学校籍の先生と一緒に教える。具体的には、小学校の先生が小学校を送り出した子、7年生の状態をみることや、中学校の先生が小学生を教えることなど、授業面で充実している。また、これまで1学年単位では家に帰ってからの子どもの交流が少なかったが、下校後に広い地域の中で学年を越えて交流することを目指した。現在は校舎が未完成で別校舎で授業をしているが、中学生が小学校のグラウンドで体育をしているのを小学校低学年の子どもが応援する。そこから休み時間に話をするなど交流が生まれ、期待以上のものが出てきている。先生は新しい取り組みで疲れてはい

るが、今後も、小規模校で施設一体型の一貫校で9年間過ごすことの利点をどう最大限に活かせるか、みていきたい。

会 長：小中一貫校について実際の話をはじめ聞いて感動しました。

委 員：7～9年生の生徒数や学級数はどうか？

委 員：全学年1学級で、中学校1年生25人、2年生26人、3年生25人。特別支援学級が小学校2クラス、中学校2クラスで、それぞれ知的と情緒である。

委 員：小学校、中学校の先生で子どもへの対応の違いはあらわれているのか。

委 員：すごく現れている。小学校では全教科を教えるが、高学年になるほど専門的な要素をもとめられる。亀岡でも10年以上専科教育として5・6年生には音楽を教えてきた。低学年では良いが、学年が上がるほど評価する先生が複数の方が子どもを多面的に見られる。子どもの先生に対する嗜好もある。5・6年生は教科担任制なので多面的に見られる。例えば中学校の体育の先生で大学まで野球をやっていた先生がおり、小学校4年生にソフトボールを教えると子どもが感動するということもある。担任と半分ずつ見られる点も良い。ただし小学校中学校で子どもへの呼びかけ方ひとつとっても違い、その辺は時間が解決する問題ではあるが。

会 長：中学校1年生の問題にもやさしく対応できるのだろう。

委 員：小中一貫校の良い所悪い所があるが、仮に一貫校になると廃校が生まれるが、廃校となってから特認校になるのか、順番がよくわからない。廃校にならないための特認校なのか。

会 長：特認校は魅力ある教育を行うためのもの。マグネットスクールをつくる。

事務局：小規模校の人数を増やすために特認校制度を使う学校が多い。そのためには特色が必要。

会 長：学校の選択性も、学校の魅力が無いと来ない。魅力を持たすことが課題。

委 員：高田中学校を特認校とした場合、校区外の遠方からの通学方法の手当はどうするのか。

事務局：全市的な通学の場合は保護者の送り迎えが基本。通学時の安全確保は保護者の責任である。引っ越し等で校区外へ事前に通う場合は弾力的な運用をしているが、その場合も保護者の送り迎えを基本としている。

会 長：私立学校のようなものと考えればわかりやすい。

委 員：今後の特認校制度でも同様の考え方なのか、スクールバス等は考慮されないのか。

会 長：アメリカの考え方の根本はスクールバスであるが、その基盤は高速道路網。亀岡では無理があり、考えていかないといけない。

委 員：魅力とは何か。自然環境の良さだけでいけるのか。子どもには放課後の生活も大事であり、学校が遠いと近所づきあいがしにくいので、自然環境だけでは行かないだろう。いじめで引っ越ししたい等の理由はあるだろうが、これは後ろ向きなもの。救済する方法とはなっている。学力については、例えば東別院小学校と西別院小学校は家庭教師状態であり、小規模校はそういう教育ができる。例えば別院中学校区に特進クラスの一貫校があれば行くのではないか。進学には親は敏感に反応するだろう。亀岡高校の評議員をしているが、数理科学科に市外から多く生徒が集まり、国公立への進学率が高まっている。小規模一貫校に特進の要素を入れられると魅力になるのでは。

会長：難しいことではあるが、教育課程に特色を持たせるという意見。

アンケートについての意見ですが、問4「ふさわしいか」という設問は、亀岡でこの制度

を行った時にふさわしいかということだろう。わかりにくいのではないか。

事務局：設問にはその趣旨で書いてあるが、各設問文を修正する。

委員：小学校調査の間2については、実際に設問内容をイメージできる人はどれくらいいるだろうか。つつじヶ丘小学校以外にも例があるのか。他にもあるなら意見も出るかもしれないが。

事務局：亀岡小学校他いくつか同様の例がある。

委員：アンケートの目的が、校区にあまりこだわらない人が多いなら、学区見直しの時に直近の学校だけでなく少し広範囲に設定することが可能かをみるということか。

事務局：これまでは分離新設での校区設定はあったが、柔軟に校区を動かす例は少なかった。

委員：例えば、学校の規模を適正なものにするため通学路の変更についてどう思うか、といった設問にしてはどうか。問題だけが急にでてくるようなので、質問の意図がとりにくいのではと感じた。

事務局：検討する。

委員：中学校区について具体的な方向性がでていっているので、アンケートも一般論ではなく踏み込んだものにすべきではないか。前半は去年のアンケートで済んでいるのではないか。具体的に中学校区毎に案を示して聞くべきではないか。そういう時期ではないか。

会長：もう少し具体的に聞かないと答えにくいのではという意見。

事務局：昨年度は、保護者・教職員に、学級数や学級人数、大規模・小規模のメリット・デメリット等について聞いた。学校区の見直し等の多様な対応をとったときに保護者はどう感じるのか、保護者として柔軟な対応を受け入れられるのかを探りたいというのが目的。小規模校については全学級を対象としているので意見を把握できると思う。

委員：対象者は2年生、5年生で全学年を対象にしない理由は何か。

事務局：昨年度と同様の学年で実施したい。1年生は入学したてで2年生を、6年生は中学校への進学もあり5年生を選んでいる。

委員：総論はこのアンケートで聞けるが各論では議論百出するので、参考にならないのでは。もっと具体的なものにすべきでは。

事務局：今回のアンケートは全市の学校規模適正化の方針を検討している。具体化するときには改めて学校毎のアンケートをすることなども考えたい。

会長：サンプル数は統計的には十分な数である。どこまで踏み込むかは行政の判断もあるので、これで進めてもらってはどうか。

委員：総論でいくならこれでよいが、各論になればそのエリアで様々な問題が出てくる。南丹市の例もあるので学区ごとに丁寧な説明とか個別アンケートとかも必要になる。アンケートですべてをクリアできるわけではない。

会長：自治会からありがたい意見をもらっているなので、踏まえながら事務局で進めてほしい。

委員：先程の小中一貫校の話に感動した。評価、成果、効果について期待も大きく今後のモデルにもなる。小中一貫校としての新しい課題もあるだろうから、次回にまた教えて頂きたい。

会長：次回にまとめていただき教えてもらいたい。

委員：小中一貫校についてはまだ始まったばかりであり、地元としては結果を急がず一年間じ

っくりみていきたい。

会 長：中間報告的に気づいたところを教えてください。

委 員：小規模校はよほど特色がないと、時間をかけて子どもを通わせる気にならない。私学も含めて競争相手が多く、何があれば子どもを集められるのか、どのような施策をやっているのか材料があれば教えてください。

会 長：教育過程に特色をもたせるとともに、説明責任、結果責任が学校に強く求められる。学校としては大変だが、成功事例もあるのでよろしくおねがいする。時間となったのでこれで閉会をさせて頂く。

事務局：次回は9月3日（木）の開催予定です。

以上